



女性部いきいきニュース

全国女性教職員学習交流集会報告 その1

全教北九州市教職員組合女性部 2015/1/24 No. 7

2014年10月11、12日岡山市で第24回全国女性教職員学習交流集会が開催されました。全国から559名の参加で、毎年の事ながらとても活気のある集会でした。北九州からも7名が参加をしました。この集会は、「ここ（岡山の地）から始まった」ということもあり、桃太郎伝説になぞらえた地元の先生方の構成劇や『ここここ ここからはじまる』という歌など、「原点に立ち戻り、未来に向けてまた、さらなる一步を踏み出すのだ」という強い思いとエネルギーにあふれた2日間でした。

この時はまだ、北九州市教職員労働組合としての参加でしたが、全教中央執行委員長 北村佳久氏から、全体会の場で全教加盟を18日に控えていることを紹介していただき、温かく大きな拍手で迎えていただきました。女性部は組合母体よりも早く全国にデビューしました。



全教 北村委員長の挨拶の後には、全教女性部事務局長 小畑さんによる基調報告がありました。今年2月にウエルとばたで女性部学習交流会をしましたが、その時にお話をしてくださった方です。12ページもある基調報告でした。その内容は、

○「道徳の教科化」をめぐる動き

授業内容・授業方法の統制、子どもたちへの評価による内心の自由への統制などが問題視されている。何よりも問題なのが、国家の考える子ども像を押し付ける教育へと変質させるための「教科化」であることである。憲法・子どもの権利条約に立脚した、現場からの自由な実践の研究・交流こそが、子どもの成長・発達を保障する道徳教育の創造につながっていく。

○「競争と管理」の教育政策のもとでの子どもと教育をめぐる状況

全国一斉学力テストの弊害。公表を許さず、中止させる取り組みを。民間企業への委託費用も含め60億円以上もの予算は少人数学級など教育条件整備に使うべき。また、高校は「競争と管理」の教育ではなく、平和学習や労働の権利の学習など主権者としての成長を保障するための教育が必要とされている。

○教科書検定基準の改定

○「貧困と格差拡大」

子どもの貧困率が、1985年は10.9%、2009年は15.7%、2012年は16.3%となっている。すべての子どもたちの学ぶ権利を保障するために、教育費の公費負担をすすめる、誰もが金銭の心配なく学校に通えるようにすることが求められている。など、上記の4つのことが特に心に残っています。(J. T)



(広島市〇〇小 原爆の木「アオギリ」の苗)



記念講演は、日・中・韓の絵本作家が紡いで実現した平和の絵本の架け橋になった「へいわってどんなこと？」を描いた絵本作家 浜田桂子さんの講演でした。絵本は、問いかけます。「へいわってどんなこと？」子どもたちは一生懸命考えます。子どもたちの声をもとに、私たち大人も考えなければいけません。



全国の仲間たちと交流する集会に参加するのは、この組合に加入して初めての経験でした。全体講演も良かったし、分科会も勉強になりました。全体会は、絵本作家、浜田桂子さんのお話でした。日本の絵本作家4人が呼びかけ、日・中・韓の絵本作家12人が連帯して、平和絵本を作るプロジェクトを始めていることを知りました。浜田さんが読み聞かせしてくれた「へいわってどんなこと？」という絵本は、その中で作られたものでした。このプロジェクトで12人の作家たちが互いに深い信頼関係で結ばれるようになったことや、本を出版した後、小学校を回って子どもたちに絵本を読み聞かせ話をしたときの様々なエピソードなどいい話や考えさせられる話がたくさん聞けました。

空き時間に販売される地域の特色を生かした様々な物販を見て回るのもおもしろく、明るくしなやかで元気に活動している女性のすばらしさが感じられた集会でした。声をかけてもらった時、行ってみようと一歩踏みだしてよかったなと思いました。ありがとうございました。(Y. K)

夜の夕食交流会では、ブロックごとに現場の様子をぴりっと辛味を効かせて、元気な替え歌や創作劇などで大いに盛り上がりました。北九州7人娘も中川書記長を筆頭にパワー全開でした！



2日目は 基礎講座、シンポジウム、4つの分科会を7人がそれぞれ分かれて参加しました。

基礎講座① “学校の病気” について考える ～生徒相談室・教職員の駆け込み寺からの提言 (沢田の杖塾 塾長 森口 章さん)

森口さんのお話は、果たして今の学校は教師も子どもも元気になる学校作りがされているかという内容から始まり、教職員や子どもたちが多くの悩みや問題などを抱えている学校現場から、改めて個人の生き方や健康な学校作りについて私たちに考えさせるものでした。

いじめられないよう自分を守るために空気を読み過ぎ、別のキャラクターを作り仮面をかぶっていつもニコニコフニヤフニヤしている子どもたち。年々深刻化する格差社会の中で、親や教師の「正しい言葉」に追い詰められ、弱みや本音を隠す子どもたち。しかしその一方で被援助力(援助される力)が育ってない子どもたち。

今、そのような子どもたちが多くの悩みを抱え、引きこもりや不登校の増加につながっている。しかし、このことは子どもたちだけのことではない。教職員にも同じ事がいえる。社会からの要求が増え、都合のよいところばかり企業と比較され管理され多忙化する一方、職場の中で酸素欠乏症に苦しみ、優先順位が狂わされ、仲間とつながることもできず、無意味感覚に苦しめられる教職員たち。そして、休職に追い込まれる教職員。休職する教職員は弱いものなのか・・・など。

森口さんのお話の中で、特に心に残り考えさせられたことは、「映画『かすかな光へ』森 康行監督作品から『基本的人権が大切にされるということは、いのちが大切にされるということ。』



という言葉と、いのちには ①一人一人違っている個体 ②他の命とつながってこそ命 ③他の命のつながりの中で変化・成長 の3つの特徴がある。『健康な学校』とは、基本的人権が大切にされる学校である。基本的人権が大切にされるということは、いのちが大切にされるということ。つまり、『健康な学校』は、いのちが大切にされる学校である。」ということでした。

子どもたちのいのちを大切に育むためにも、まずは教職員のいのちが大切にされる職場でなければならないと改めて感じました。苦しんでいる教職員がいる学校を基本的人権が大切にされている学校、いのちが大切にされている学校といえるでしょうか。そのよ

うな学校が子どもたちのいのちを大切にできるでしょうか。

子どもたちのいのちを大切に育む事ができる「健康な学校」をつくるためにも、指導改善の取組だけではなく、教職員の働き方や考え方、自分らしい生き方を改めて考えていく必要があると思いました。(H)



基礎講座②女性教職員の今、これまで、これから
第1回の全国女性教職員学習交流集会は岡山で開かれました。そして今年第24回が再び岡山で開かれ、この24年間を振り返ってのシンポジウムがありました。



京都での「子育てママの会」の取組、群馬高の30代女性部長さんの新しい感覚での取組などを中心に、全教女性部を創立当時から支え続けてきた大先輩の話を交えながら、厳しい状況の中で頑張っている全国の仲間と交流することができました。

男性で育児休暇を取得中の経験談、広島的女性部まつり、長野の育児休暇復帰支援セミナー、育児期間中の短時間勤務の取組など、今後の活動の目標となる話がたくさんありました。

今や「ブラック企業」化している学校現場ですが、

・自分たちでブラック化してはいないか？
・仕事をする中での感動を、時間外労働の対価として納得してはいないか？ という問いかけがありました。

また、ある学校では、5時に斉唱「ほたるの光」、5時半に合唱「ほたるの光」、6時にオーケストラの「ほたるの光」を流し、職員の下校を促しているとか(笑) 定時退校日にどこかこの取組を始めませんか？ 毎日流れたらおもしろいですね。(K. N)



(全国からの物販で賑わう休憩時間)

分科会④どの子ども大切にしたい学校づくり

和歌山の先生の実践報告がありました。—3年前の台風で被災した子どもたちの心のケアの研修を継続している。保護者へのアンケートをもとに、被災後からの変化を記録し、心が揺れる子ども達にいろんな職員が関わりを持ち、見守っている。職員室では子どもの状況を語り合い、担任が一人で抱え込まないようにしている。授業のことでぼやいていると「こんなのやってみたよ。」と実践交流が生まれ、手作りの教材・教具は保存し、次年度に活用している。—職場の人間関係づくりが、どの子ども大切にしたい学校づくりの基になっているという報告でした。

参加者の自由討論では、全国の職場で安倍教育再生のもとでの厳しい状況が出されました。特に若い先生が 自由にものが言えず、実践の悩みを抱えているということです。荒れた中学校の先生が家庭訪問を繰り返し、子ども一人一人と根気よく話していることに、改めて子どもを見る目の暖かさを感じました。

あまりの忙しさで話す時間と余裕が奪われていることに改めて気付かされました。語り合うことでつながり、つながることで安心する学校づくりを進めたいものです。(F. N)



女性部いきいきニュース

全国女性教職員学習交流集会報告その2

全教北九州市教職員組合女性部 2015/1/24 No. 8

分科会②しゃべり場「震災その後と被災者支援」

2013, 3, 11の東日本大震災から3年9ヶ月が過ぎた。震災後の復興と福島原発はどうなっているのだろうか気にはなっていた。が、TVにニュースが流れたときは耳を傾け、なかなか進まない現状をその時に知っても、日常的には忘れていた。本来なら現地に行き、目で見て、体で感じなければいけないと思うが、なかなか行動に移せないで、この分科会に参加した。

○宮城県立支援学校の報告

・宮城県の沿岸部には、復興の工事のための大型トラックがたくさん走っているが、1年前の現状とほぼ変わらず、復興は進んでいない。工事に必要な材料や労働力は東京オリンピックの工のために高騰し入手困難であり、東京の現場に持って行かれている。
・岩手・宮城・福島3県の沿岸や避難区域にある計42市町村所在の公立小中学校、特別支援学校のうち、2014年3月現在も仮設校舎や他校などに間借りして授業をしている学校が86校に上る。(共同通信)
・宮城県教委は9月、不登校の小中学生のうち、少なくとも約8%に東日本大震災の影響が覗えると分析した。

○福島県立高教祖の報告

・福島県では、30キロ圏内にあった10の高校は、3, 11以降生徒数が激減し、毎年入学者数が定員割れしている。ひどい所は在籍生徒数が10分の1になったところもある。10校のうち、5校は2014, 4月の1年生の募集を最後に、3年後の2017, 3月には閉校する。今年の卒業生は、仮校舎で入学し、仮校舎で卒業する。
・警戒区域が解除になり町への帰還が進められている広野町は、帰還した住民1628人《本来の31%(2014, 7月現在)》に対し復旧作業員2600人という、町民より復旧作業員の方が多くなった。外部の人たちが多く、治安も悪くなっている。来年度から中高一貫教育の「ふたば未来学園高校」が開校する。

その他、岡山県内で被災地から避難している皆さんとつながって活動している「うけいれネットワークほっと岡山」の報告もあった。

報告されている時もそうであったが、身内に避難されている参加者の方がいて、涙なしでは語れない内容ばかりだった。日々、放射線量におびえながらの生活、苦しい仮設住宅での生活、いつ収束するかわからない福島原発の事等の話も聞いた。断固、原発再稼働反対の思いが強くなった。同じ日本で苦しんでいる人達がたくさんいる。

自分にできることを取り組んでいきます。(A)



分科会②しゃべり場「震災その後と被災者支援」

I 宮城県の富川先生の報告

被災地に必要な工事の材料は、東京オリンピックの工のために高騰し、入手困難、労働力も東京に持っていかれる。東京の方が賃金が高いから。復興とは程遠い皮肉な状況がある。仮設住宅は、老朽化している。夏はエアコンが効かない。壁が薄く、冬は寒い。結露でカビが生えている。公営住宅建設は遅れている。仙台では足りないが、石巻では余っているという現象が起こっている。石巻は以前から町村合併が進み、ケアができず、あきらめて出ていく人が多い。仙台は人口増である。

子どもたちの、特に中学生の荒れが増えた。1, 2年間は我慢していたが、3年たって噴出している。仮設での生活、離婚など家族の問題が影響している。学校も仮設だったり、他の学校を間借りだったりして肩身の狭い思いをしている。宮城県の中学生の不登校出現率は、一昨年度、昨年度と2年連続全国一。

仮設の近くにはパチンコ屋ができた。仕事のない人が行っている。行く人が悪いわけではない。仕事さえあれば……。

宮城県は福島県の隣で、会津より放射線の値が高いところがあるが、話題にされない。

II 福島県高教組 女性部長の大貫先生の報告

3.11以降の高校の生徒数の推移について。30キロ圏内の10の高校は、生徒数が激減し、毎年定員割れをしている。誰でも入れるので、学力格差が大きい。生徒も勉強しなくてもいいという安心感がある。5つの高校は今年の入学募集が最後となり、3年後には閉校する。

報告の最後、大貫先生の「私のライフワークが『原発ゼロをめざす』ことと言うのが悲しい。」という言葉が忘れられません。

三人目は、「うけいれネットワークほっと岡山」の服部さんの報告で、民間支援団体による避難者支援についてのお話でした。服部さんも国分寺市から岡山に避難された方です。

参加者は報告を聞いた後、質問や意見を交わし交流を深めました。震災は終わっていない。これを遠くであったことにしてはいけない。この分科会に参加した人たちは、この場で知ったことを、組合・職場や知人に知らせていこうと決意し、会場を後にしました。(T)



(岡山で待望の物販デビュー)

その他、次のような話もありました。

分科会①特別支援教育の今・・・

障害児学校の設置基準策定など教育条件整備を求める運動、子どもの発達保障の実践、みんなで支え合う障害児学級・学校での実践など

分科会③ジェンダーの視点で学校を

七生養護学校「こころとからだの学習」裁判、高校家庭科の実践をもとに、ジェンダー平等や人権を尊重する教育の推進について



学び合い、語り合った2日間でした。

毎日が忙しくてくたくたになり、気持ちもからだも疲れ切っている日々で、参加するにはなかなかの決心がいらいます。



それでも、やっぱり参加すると・・・休みがなくなるなんて何のその！気分爽快！元気が湧いてくる！気力がみなぎってくるのです。「集まれば元気！語れば勇気！」全国の女性教職員のパワーに触れて、自分にもまだまだできることがある！と思えた集会でした。



(東日本大震災にあった宮城・岩手・福島の先生方に、カンパ金の贈呈)



オープニングは「アロハアイナース・フラスタジオ」の皆さんによるフラダンスでした。フラの先生と子ども達によるダンスは、それはそれは愛らしく美しいものでした。



フラダンスの動作に一つ一つ意味があっ、感動でした。特に「花は咲く」など、日本の曲をハワイの言葉で歌い、思いを込めた踊りはこころの奥底まで染み渡りました。涙が出てきました。(速報より)



初代女性部長としては、この4年間での市教労の飛躍ぶりに感謝の思い。「田舎のねずみ」のような気持ちで、4年前の大阪集会に、高津さん、中村文さんと3人で参加したことが遠い昔話になりました。**2014年**は念願だった全教への加入も、集会での物販も**実現**することができました。



物販は、私の大きな目標でした。資金を稼ぐことはもちろん、仲間がいないとできないことだし、他教組の人と声を掛け合える**友好**の場であり、自分の組織を宣伝する格好の場だと思っていたからです。夏、香川での「教育のつどい」で出会い、クリアファイルの押し売りをした北九大出身の香川教組の先生にも物販会場で**再会**し、またもや羊羹を6個も買っていただきました。(中川)



女性部の先生方、来年はあなたが！あなたが是非参加してください！宝物が増えること間違いなし！です。

2014年は組合員の皆様のカンパと物品販売で7名の参加ができました。**2015年**もがんばります。ありがとうございました。多くの仲間を誘って全国の仲間と学びあいましょう。(佐藤)